

朝霧の中で

夕ご飯もお風呂もすんであとは寝るだけになった八時半、僕は居間でみんなとテレビを見ていた。テレビの中でお笑い芸人がおかしな事を言えば居間の中でも笑い声がある。お父さんもお母さんも、おばあちゃんもみんなテレビの方を向き笑顔になっている。もちろん僕も大笑いをしながらも、居間におじいちゃんの姿が見えない事に気がついた。まだ、笑いの「ねえ、おじいちゃんは？」

と誰に言うこともなく聞いてみた。

「さっき部屋から出て行っただけど、まだ戻らないねえ」

お母さんが答えると

「トイレかも」

おばあちゃんも言いますが、顔はテレビに向けたままだ。

「僕もトイレ」

居間のドアを開けると、続く廊下の端におじいちゃんの姿が見えた。

「何してるの？」

廊下の窓を開け、外を見ていたおじいちゃんの横に立つと顔を見上げながら尋ねた。

「よかお茶になるばら」

おじいちゃんが答える。僕は、何をしてるのかと聞いたのに答えがお茶？もちろんおじいちゃんとおばあちゃんは畑でお茶を育てているのは知ってるし、忙しくなればお父さんもお母さんも茶畑へお手伝いに行くことも知ってる。でも廊下について、なぜお茶と言う言葉がでるのか僕には、さっぱりわからないう。

「なぜお茶なの？」

もう一度尋ねてみました。

おじいちゃんは、窓の外の暗い庭から視線を外さないうまま

「四月になってから、一番暖かな夜ばい。そして、予報は明日は晴れるって言いよった」

「それが？」

「明日ん朝は霧で、畑は真っ白になるとばら」

「へえ。でも明日は学校休みだから霧が出て困らないし、雪じゃあないから雪合戦もできなうし」

「そうか、そうか。朝霧ん出っとうみゃーお茶がでくつとばい。明日ん朝早起きして茶畑と一緒に歩いてみるか？」

窓から視線を僕に移し、おじいちゃんが聞いてきた。せっかくの休みに早起するのは、嫌だけどそれ以上に僕はおじいちゃんが好きで、おじいちゃんの茶畑も好きだった。じゃまだからと言う理由でお手伝いをさせてくれないのは、家族の中で一人だけ除け者にされているようでずつといやだったんだ。

おじいちゃんと居間に入りながら、

「ぜったい一人で行かないでね。寝ていたら起こしてよ」
と念を推すことを忘れなかった。

朝早く起きると、おじいちゃんの子言通りあたりは霧で真っ白だ。二人の周りだけ見え、それ以外は真っ白な茶畑までの道を歩く。二人が動くと、見える世界も動く。まるで世界の中心にでもいるようだ。茶畑に着くとおじいちゃんはしゃがみ込み、一枚のお茶の葉にそつと触れた。

「聞こえる、聞こえる」

「何も聞こえないよ」

「指からお茶ん声ん、聞こえてくつとばら」

僕もしゃがみ込み、お茶の葉を人差し指で触れてみた。何も聞こえない。指先が霧の水分でじつとりと濡れてきただけだ。その間も、おじいちゃんは次の葉に指を当てている。

「こんお茶ん葉もあんお茶ん葉も、釜炒り茶にしてくれて言いよー。あつ、こん葉もだ」

次々にお茶の葉に触りながら楽しそうにおじいちゃんは話す。何度触っても僕には、何も聞こえてこない。少しずつ霧が消えていこうとしている。もう、長く真っ直ぐに伸びた茶の木たちの先まで見えてきた。聞くことのできなかつた僕に

「いつじやい聞こえてくつかもな」

そう言うおじいちゃんの手を、帰り道ずっと僕は繋いでいた。ごつくて、皮膚も固くて大きな手だ。僕の手の二倍はありそうだ。僕も大きくなって、おじいちゃんの手みたいになれたらきつとお茶の葉の言葉を聞くことができるかもしれないと思いつつながら

「お腹空いたね」

と違う事を言ってみる。

おじいちゃんはずきながら

「まずは、かぶせ茶ば飲もう」

と言った。もちろん、おじいちゃんが摘んで七日間寒冷紗の下で寝かしたあのお茶だ。去年も一昨年もおじいちゃんは霧の朝にお茶の葉と話しをしたのだろう。そして今から飲むかぶせ茶の葉たちは、きつとかぶせ茶を希望した葉たちに違いない。

家が見えてきた。玄関で僕たちに手を振るおばあちゃんの姿も霧のすつかり消えた今はつきりと見える。おじいちゃんと手を離すことはなく左手で僕はおばあちゃんに手を振った。